

「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～「疑う当たり前」と「大事にする当たり前」ってどういうこと？～



この方は、島根県開星高校野球部の野々村 直通（ののむら なおみち）先生です。（広島大学卒業後に広島で県立高校に美術教師として赴任。さらに、荒れていた学校を次々に「人間教育」で建て直し、甲子園に計10度出場）この先生の話をお聞きしたと思い、仲間の先生たちとお願いして、私たちに講演会（勉強会）をしてもうために島根からわざわざ伊丹までお越しいただいたこともあります。

この野々村先生の教え子の安田 諒平さん（開星高校～慶応大学）が、社会人生活3年を過ごした26歳の若者の代表として本を出されています。野々村直通監督の野球を教えない「やくざ監督」と呼ばれた強面野球部監督の揺るぎない「信念」と、社会に出てから知った安田さんの「若者の感覚や考え方」を融合した“解決法”のヒントが書かれています。

そもそも「当たり前」とは、人それぞれの基準です。

他の国へ出てみると、日本での当たり前が当たり前ではないのだと気づきます。ゴミが街中に落ちている、電車が時間通りに来ないのが当たり前の国も珍しくありません。

職場でも、この「当たり前」の違いが問題を起こします。「部下が何を考えているのかわからない」、「俺らの時代だと考えられないような行動をする」。

そんな悩みの多くは、上司と部下の「当たり前」の違いが原因です。

特に日本は周りとの同調性が高いため、「普通」や「当たり前」という言葉をすぐに使います。例えば、欠席の連絡を電話やメールで伝えることが当たり前の上司にとっては、若者がスマホのアプリで欠席の連絡してくるのは到底信じられません。当然、怒ります。

しかし、僕たちからすれば、休みを伝えることが目的なのであり、その手段は何でもいいのではと思うのです。だから、どうして怒られるのかがわかりません。

この「部下の扱いがわからない」、「常識が通じないからどうすれば」という悩みは、それぞれの「当たり前」を共有することで解決すると思います。この「当たり前」の違いは、受けてきた教育や環境の違いによるものです。何を教わったのか、何をすると褒められて、何をすると怒られたのか、が大きく影響しています。上司が自分たちの「当たり前」を話し、部下も自分たちの「当たり前」を伝えることで、両者をすり合わせることは可能だと思います。

こうした例は、手段、手法における「当たり前」なので「疑う当たり前」に分類されます。手段や手法は時代とともに変化したり、アップデートされるものだからです。

一方、礼儀や道理は、100年前も、昨日も今日も大事だと言われてきたものではないでしょうか。おそらく明日も大事だと言われているでしょう。

先人たちがはるか昔から大事だと感じ、残されてきたものは「大事にする当たり前」に分類できると思います。

監督さんは、「人生の目的は世のため人のために生きること」と言い切ります。

僕たちは意図してこの世に生まれてきていません。だから自分のために生まれてきた訳ではないのです。どれだけ時代が変わっても、目の前の人や次の人のことを思う気持ちが込められた「当たり前」は、大事にしていかなければなりません。

「甲子園の名将に学ぶ、これって意味ありますか？とすぐ聞く若手の褒め方・叱り方」安田諒平著



安田さんが書いておられる「疑う当たり前」と「大事にする当たり前」って……

この通心（信）のタイトルト……「不易」と「流行」と……あっ！……同じじゃん！